

作品タイトル…踊る理由

元にした作品のタイトル…あかいくつ

著者名…宮沢 早紀

あらすじ

発表会へ参加するかどうか。ダンスクラスの受講者は夏蓮を除き、賛成と反対に分かれていた。なぜレッスンを受けているのか、なぜ踊るのか。皆の動機が明らかになる中、夏蓮はそれが分らぬまま結論を急かされる。賛成と反対の板挟みになりながら、夏蓮は赤いダンス靴で踊ることしかできないのだった。

特記事項

最近、いろいろな場面で「なぜそれをするのか」という動機を明確にしなければならぬように感じるようになりました。ただなんとなくやっている者としては、明確な理由を求められ続けると息苦しさを感じてしまいます。そのことを、アンデルセンの「あかいくつ」をベースにした短編小説にしました。

本編の文字数…4870文字

レッスンを終了間際に講師のエミから発表会に関する説明があったことで、スタジオには浮ついた空気が漂っていた。夏蓮には、どの受講生も懸命にいつも通りを装いつつも、発表会の件について一刻も早く話したいというのがにじみ出ているように見えた。

エミによるとアトラススポーツクラブがグループ全体でダンスの合同発表会を検討しているらしく、土曜三時のジャズダンスクラスも対象だという。

「このクラスは七人なので、四人以上希望者がいたらエントリーしたいと思います」  
合同発表会の案内チラシを配りながら、エミはそう言い添えた。

業界では中堅のアトラスグループにも経費削減のお達しが出ているのか、配布されたチラシは白と黒の二色刷りだった。左上の「ご要望におこたえして開催決定!」というはりきった文言が妙に浮いて見える。

スタジオに残っていた夏蓮はクールダウンのストレッチをしながら、この「ご要望におこたえして」というフレーズを反芻していた。半期に一度くらいの頻度で配られる受講者アンケートに「発表の場がほしい」と書いた人が多くいたのか。会社として新しい取り組みをやる必要があって、企画担当の人たちが「それならダンスの発表会なんかどうだろう」と思いついたものを建前上、受講者の要望としたのか。アトラスの偉い人が「発表会をやろうよ」と鶴の一声的に言ったものを実施することになった可能性もある。

開催の経緯がなんにせよ、夏蓮としては発表会はやってもやらなくてもどちらでもよかった。

「サクちゃんさん! 発表会、あたしたち出るべきです!」

スタジオの奥で茉依が興奮気味に佐久間に話しかけていた。

「えーなんで?」

「スペシャルゲストにリッドのヨウスケが来るって」

「そんなこと書いてあった?」

「裏です、裏!」

「おーホントだ。茉依ちゃんファンなんだっけ?」

「です。ツアー当たっても、ドームで豆粒みたいなヨウスケしか見たことなかったんですけど、これだったら近くで見れそう」

「茉依ちゃんがダンスを見てもらう側だけだね」

「わあ、なんか恥ずかしい! でも、ヨウスケには会いたい」

「目、合うかもね」

「それはヤバイ。踊れない」

茉依と佐久間の笑い声が響く。茉依は夏蓮と年齢が近いはずだが、夏蓮の高校一年になる従妹の方がまだ落ち着いているのではないかと思うくらいに、いつもはしゃいでいる。小学生の娘がいる佐久間はそんな茉依をうまくあしらっていた。

「発表会の話? わたしも出たいと思って」

夏蓮と同じようにストレッチをしていた鞠子が二人の方へ歩み寄る。

「鞠子さぁん、出ましよう出ましよう！」

「目標があった方が頑張れるわよね」

鞠子は錫色に近いロングヘアをきれいな団子にまとめながら言った。

「たしかにそうですね。ご家族に観にきてもらうんですか？」

「夫は来るかわからないけど、孫たちには観てもらいたいわね」

「わたしもせっかくだから娘に観てもらいたいな。いつもママ何やってんの？ って思われてるみたいだし」

「サクちゃんのお嬢さん、同じ時間でスイミングのクラスに出てるのよね？」

「そうなんです。家族割でレッスンを受けますよって言われて、せっかくだから送迎ついでに同じ時間帯のレッスンを受けることにして。だからあの子、わたしが踊ってるの見たことないんですよ」

「いいじゃない！ みんなに観てもらいましょうよ」

三人は発表会に向けてうまく踊れるようになりたいと盛り上がっていた。その輪に加わることなく、夏蓮は更衣室へと引き上げた。

夏蓮がシートで汗を拭きとっていると、ロッカーの向こう側から話し声が聞こえてきた。

「……臨時レッスンとかやるんですかね？」

「困るよー家で練習する時間とか取れないもん。仕事のストレス発散のために体動かしたかっただけなのに、発表会なんてなったらガチじゃん」

おそらく玲と大学生の希帆だろうと夏蓮は察する。玲とはレッスン帰りの電車が一緒になったことが何回もあったが、土曜でも仕事へ行くような服装で書類がぎっちり詰まったカバンを肩に掛けており、忙しい仕事の合間を縫ってレッスンを受けにきているようだった。

「わたしもただ踊るのが好きってだけで……行事とかで人前で踊らないといけないのがヤだから、サークルに入らずにアトラスに入会したのに」

「そうだったんだ」

「衣装揃えてばっちりメイクして、ってお金もかかるし、大変そう……」

「ねえ！ 二人とも不参加？ よかったー！ 仲間、仲間！ わたしだけだったらどうしようかと思ってたわぁ」

二人の会話に境が加わったようだった。姿は見えないが、ハスキーボイスですぐに境だとわかる。

「わたしもさあ、運動不足解消のために始めただけで、人様に見せるなんてちょっとできないよー。こんな体型だし、ねえ？ あ、ごめん。会話ぶった切っちゃった？」

「大丈夫ですよ」

玲と希帆は即答していたが突如、現れた境の勢いに少なからず驚いているようだった。

夏蓮としては踊ればどこでもなんでもよかった。踊るのが好きでたまらないというわけでもなく、なんとなく心地よくて続けているだけだったので、発表会の参加は成り行きで決まってくればそれでよかった。

ただ、今回の発表会をきっかけに一人一人の踊る理由みたいなものが——それが本心かどうかかわからないにせよ——なんとなく見えてきて、それらを聞いているうちに夏蓮にはほかの受講者のような明確な理由がないことを自覚させられ、それがどこもなく後ろめたく感じられるのだった。

「発表会の参加希望、今日までなんですけど、どうですか？」

二週間後、レッスン前にフロントを通った夏蓮をエミが呼び止めた。

「えーっと……わたしはどちらでも……」

「実は参加と不参加が三三で割れちゃって……夏蓮さん次第なんです」

「はあ……」

「今日のお帰りまでにいただければ大丈夫なので、もうちょっと考えられますか？」

「そうですね……じゃあ、帰りに……」

夏蓮は戸惑った。夏蓮の回答でクラス全体の発表会の参加有無が決まってしまうなんて。面倒なことになってしまった。

スタジオに入ると、先に来ていた受講者が一斉に夏蓮を見た。皆、夏蓮の回答次第で発表会の件に決着がつくことをわかっているようだった。

「ねえ、あなたのシューズ、前から素敵だなんて思ってたの。赤って珍しいわよね」

人と話すのが苦手な夏蓮は、いつも話しかけられないように硬い表情を作り、ほかの受講者と目を合わせないようにしてきた。その甲斐あって今まで話しかけてくる人はいなかったのだが、今日はウォームアップのストレッチを始めるなり、鞠子が話しかけてきた。

「はあ……もらいものです」

「踊るときはいつもそのシューズって決めてらっしゃるの？」

「ええ、まあ」

「そういうのありますよね。自分にスイッチを入れる的な」

鞠子に加勢するように茉依も子犬のように近づいてきた。夏蓮の本心を探るように大きな瞳で夏蓮を見上げてきて、夏蓮は思わず後ろに下がる。鏡越しに反対派がこちらを冷ややかな目で見ているのがわかり、気まずい。

「今回の発表会のテーマはパッションだから、みんなで赤いシューズ、赤い衣装で踊るのがいいかもですね」

「あら、いいわねえ」

鞠子と茉依が無邪気に笑う。発表会のテーマなどチラシに書いてあっただろうか。夏蓮が覚えていたのは「ご要望におこたえて開催決定！」だけだった。

「ちょっと、お手洗い……」

夏蓮は逃げるようにスタジオから出た。すぐにスタジオに入ってまた鞆子と茉依に捕まるのがいやだった夏蓮は、手洗いを済ませたあと廊下の壁にもたれかかっていた。スタジオから出てきた佐久間が申し訳なさそうな表情で夏蓮へ近づいてくる。

「あと一人出たっていう人がいたら、発表会に参加できるからうれしんだけど……でも、ご都合やお気持ちもあるし……もしも気が向いたら、お願いします、ね」

佐久間は「じゃ」と胸元で小さく手を振ってスタジオへと戻っていった。佐久間を見送りながら、夏蓮は体の内側に重たいコンクリートブロックを埋め込まれたような、いやな感じを覚えていた。

好きにしてよ。そう口に出す勇氣はなく、心の中でつぶやく。夏蓮が受講をやめてクラスが六人になったら、どうなるのだろう。その場合は反対派から一人が賛成派に回らないと参加はできないのだろうか。そんなことを考えていたら、エミがスタジオに向かって歩いてくるのが見えたので、夏蓮は慌ててスタジオへと入った。

レッスンはいつも通りに進行した。踊りはじめると、夏蓮は踊りに集中できるのだった。手の先、足の先にまで意識を向けて伸ばす。曲に合わせて回転し、ステップを踏む。そうしているうちに、発表会に関するごたごたは夏蓮の意識の及ばぬところへ追いやられていった。

ところがエミが七分間の休憩を言い渡して出ていくと、夏蓮は再び現実に引き戻された。逃げ込むようにトイレへ行き、そろそろ大丈夫かと思っ出てきたところに発表会反対派の三人が待ち伏せしていたのだ。

「違ったら悪いんですけど、発表会参加されないですよね？」

玲が試すような視線を送ってくる。

「ええ、まあ……特に希望しているわけでは……」

「よかったあ。ほら、あなたダンスがとっても上手で経験者って感じだったからどうかしら！って思ってたんだけど、よかったあ！」

肩から提げたスポーツタオルで汗を拭いながら境が言い、「ごめんねえ。一人だけ風呂上がりみたいだよねえ」と陽気に笑う。

「人に見せるためとかじゃなくて、踊りが好きだから踊るんですよ、わたしも同じです。

自分の内側から湧き上がってくるものを外へ出すみたいな」

希帆はやっとわかりあえる人に出会えたと言わんばかりの笑顔を夏蓮へ向けた。

「不特定多数の人のために練習をして踊るなんていうのはダンスの本質というか、本来の目的とズレてる感じがしますもんね」

腕組みをして分析をするように玲も続いた。

三人は満足そうにうなずきあったあと、連れ立ってスタジオへと入っていった。少し間を開けて夏蓮もスタジオへと入ると、すぐに後半のレッスンは始まった。

人に見せるために踊るのではない。夏蓮としては反対派のこの考えには同意できたが、希

帆が言っていたような、内側から湧き上がってくるものを外へ出すような感覚はなかった。夏蓮は空っぽの容器のようなもので、ダンスを通じて自分を表現したいというような思いは持ち合わせていなかった。ほんとうに踊りが好きなのかどうかもわからない。

ただなんとなく、それだけが夏蓮が踊る理由だった。

「さあ、踊れ」

夏蓮の耳元で何者かがささやいたような気がした。

「踊る理由が、わからない……」

ささやき声の主に助けを求めるように夏蓮はつぶやく。

「踊れ。踊ったらいい」

「踊ったらわかるの？」

夏蓮の問いかけに対する答えはなかったが、曲がかかり、右手を上には振り上げた瞬間、夏蓮の意思と関係なく体が動き出した。

「誰？ 何なの？」

「踊れ、踊るんだ」

止まろうと思っても止まることができなかった。夏蓮の体は動き続ける。手をくねらせ、ステップを踏む。体を大きく仰け反らせたかと思うと、今度は体をぴたりと畳むようにして前に倒れる。高く跳び上がり、くると回る。

決められた振付を無視して激しく踊る夏蓮に鏡の前に立つエミが叫ぶようになっていくなにかを言っているようだったが、エミの声は届かない。夏蓮にはただ、不機嫌なエミの顔だけが顔を上げた瞬間にちらりと見えるだけだった。

ほかの受講者たちがさあーっと離れていったことで、夏蓮の周りに空間ができた。夏蓮は回転しながら円を描くように進み、空間を最大限に使って踊った。受講生たちは発表会賛成派も反対派も皆、部屋の隅に集まって夏蓮が踊り狂うのを呆然と見ていた。夏蓮の突然の暴走によってレッスンは中断したことに苛立っていたエミも、鏡に片手をつけて力なく夏蓮を見つめている。

夏蓮はただひたすら踊った。髪は乱れ、口は半開きになり、Tシャツも汗で色が変わっていたが、止まることはなかった。

「踊れ、どこまでも」

声に従うことしかできない夏蓮はやがて、踊りながらスタジオの外へと出ていった。